

シェイクスピア戯曲とラム『シェイクスピア物語』を一括りにした例をもうひとつあげよう。紅樓夢評論、戯曲史研究でも有名な王国維だ。

王国維「シェイクスピア伝 [莎士比伝]」（『教育世界』第159号1907.10初出未見。姚淦銘、王燕編『王国維文集』第3巻 北京・中国文史出版社1997.5。392-397頁）である。

王国維の該文は、林紓らの『吟辺燕語』より公表された年は遅い。だが、1907年というかなり早い時期の研究論文だ。林紓とほとんど同時期だといってよい。しかも、比較的詳しい伝記である。王国維が書いたシェイクスピア伝に私は注目する。

興味深い一覧表がある。「劇詩」すなわち戯曲のことだが、その題名を掲げて喜劇、史劇、悲劇などと注記したものだ。

1例をあげよう。

「“The Comedy of Errors.” 閩県林紓訳作《擧誤》一五九一年」と表示する（カッコをあてがったのは文集編集者だろう）。

この一覧表には、同じくシェイクスピア作品の英文原題に添えて『吟辺燕語』に収録してある20作品をすべて掲げる。

さらに「叙事及抒情之詩」という小見出しをつけた説明がある。ここに見える「詩」は、戯曲を意味していることはいままでもない。

解説して「この表のなかの『鬼詔』『黒瞽』『蠱徴』『女変』など4篇は、通例「4大悲劇」と称せられる」（397頁）と書く。シェイクスピア戯曲を説明するために、林訳ラムの題名を利用するのだ。

戯曲についてよく理解している王国維が、小説化本のラム、それも林訳を併用してシェイクスピア名で一括りにしている。

本来ならば、中国の研究者は、王国維も戯曲と小説の区別をつけていないと批判しなければならないところだ。

だが、林紓は批判するが、林と同じことをした王国維は批判しない。これを普通は評価の二重基準という。つまり、中国の学界において林紓批判は公認となっている。林紓については、どのように罵ろうが許されるのだ。

当時の中国では、戯曲と小説を区別しないことがあった。たとえば、「伝奇小説」と角書があつて実態は戯曲という例を多く見ることができる*6。

林紓を批判した鄭振鐸自身が、当時、小説と戯曲が区別されていなかった事実があることを書いている。

彼の前出論文「林琴南先生」にこうある。